

森のちやれんがニュース

2026 春

Newsletter vol.43



第26回企画テーマ展「吉田初三郎が描いた北海道」を開催しました(2026年1月31日～3月22日)

鳥のような視点で広大な景色を描く「鳥瞰図」。吉田初三郎(1884-1955)は、北海道を含めて全国各地の鳥瞰図を少なくとも1600種以上描きました。本展では、完成から90周年を迎えた「北海道鳥瞰図」と十枚組風景画「北海道十景」を一挙公開!北海道内各地の観光パンフレットや絵葉書に掲載された鳥瞰図や風景画にも注目し、かつての北海道の姿を紹介しました。

1章「鳥瞰図一空からみたまちなみ」では、描写の細かさ、大きさ、配置、色彩など、鳥瞰図に凝らされた工夫をとおして、初三郎が描き出した各地の魅力

をたどりました。2章「肉筆画—北海道鳥瞰図と北海道十景—」では、横幅約5.7mの大画面に描いた「北海道鳥瞰図」、10枚組の作品として北海道内各地の風景を描いた『北海道十景』を一堂に会しました。これらは当時の北海道の都市、交通網、景勝地や観光地や魅力的なスポットを伝える作品です。3章「絵葉書・装幀—まちのイメージを描く—」では、鳥瞰図とは異なる手法で制作した絵葉書や観光パンフレットの表紙などから、初三郎に仕事を依頼した地域がどのような見どころを発信しようとしたかを読み解きました。(学芸主査 圓谷昂史)



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
注記からみる熊野コレクション
- ③ 総合展示資料紹介・第5テーマ
「生き物たちの北海道」…あれ、植物は?
- ④ 研究活動紹介
アイヌ民族のクワサキ
—文献と実物から見えてくるもの—
解説案内スタッフレポート
北海道鳥瞰図をじっくりご覧ください
- ⑥ トピックス
ここに注目!
北海道博物館のウェブサイト
アイヌ民族文化研究センターだより
- ⑦ 総合展示「アイヌ文化の世界」を
一部リニューアルしました
- ⑧ 活動ダイアリー
2025年12月～2026年2月の記録

収蔵資料紹介

注記からみる熊野コレクション

柴野初音

北海道研究センター(人文系) 学芸員

当館をはじめ多くの博物館では、収蔵している資料を整理・管理するため、資料それぞれに収蔵番号を振っています。そして保存に影響が少ない材質の資料であれば、資料の目立たないところにその収蔵番号を注記する(書き込む)ことで、資料と収蔵番号、データベースの資料情報とを明確に紐づけ、管理をしやすくします。写真の土器というと、口縁部内側に、白い文字で逆さまに書かれた「42045-2」という数字がこの資料固有の収蔵番号です。

そしてこの土器には表面にも赤色で「第二号／一九五〇年／五月／フトロ遺跡」とまた別の注記があります。

この注記をしたのは熊野喜蔵という人物で、北海道南部を中心に、考古資料をはじめ産業や生活に関わる資料などを多く収集しました。熊野氏の収集した「熊野コレクション」は1970～1975(昭和45～50)年に当館(当時、北海道開拓記念館)に寄贈された、当館収蔵の考古資料の核となる資料群のひとつです。



太櫓遺跡で出土した土器
(収蔵番号：42045-2)



注記部分(拡大)

写真の土器は、熊野氏による「フトロ遺跡」という注記から、北海道南部にある太櫓村(現在のせたな町)の太櫓遺跡で出土した土器であることがわかります。なお、当館資料目録では太櫓遺跡出土資料も、近隣の生淵遺跡出土資料に含めて整理しています(北海道開拓記念館編 1980)。

この太櫓遺跡は熊野氏が新たに発見した遺跡であり、その発見を受け1950～1951(昭和25～26)年ごろ発掘調査が行われました。したがって「一九五〇年／五月」という注記は、この資料が発掘された時期をあらわすと考えられます。また「第二号」という注記は、他に「第一号」、「第三号」などと書かれた土器があることから、太櫓遺跡で出土した複数の土器を整理するための通し番号であると推定されます。また、写真の土器をよく見ると、複数の破片を貼り合わせ本来の形に復元していることがわかります。

このように当館に収蔵される以前に丁寧に修復・復元、さらに整理された資料が多いことは熊野コレクションの特徴のひとつです。

熊野氏は土器などの考古資料の収集を始める以前より、切手やマッチなども収集していました。それらの整理について「これらのものを毎日仕事の終わった夕食後に整理するの

が私の毎日の日課であり、そしてこれが私の何物にも代えられない楽しみになっていた」と自叙伝で語っています(熊野 1970)。資料を集めるだけでなく、その整理も精力的に行っていたことが実際の資料からも記録からもわかります。

このように収集・整理した資料の公開のため、1947(昭和22)年以降、数回にわたり展示会が開催されたのち、1965(昭和40)年には私費を投じて森町に「熊野記念館」を開設し、広く公開しました。その後、将来資料が散逸することを危惧した熊野氏により、資料の大部分が当館へ寄贈され、今日に至っています。

2026(令和8)年4月から8月のクローズアップ展示1では、熊野コレクションの考古資料について紹介する予定です。ぜひ注記にも注目してご覧ください。

引用文献・参考文献

- 熊野喜蔵 1970. おやじの足跡.
北海道開拓記念館編 1979. 熊野喜蔵氏資料目録・I. 北海道開拓記念館一括資料目録 12.
北海道開拓記念館編 1980. 熊野喜蔵氏資料目録・II. 北海道開拓記念館一括資料目録 13.
※引用箇所の旧字体・異体字・旧仮名遣いは新字体・現代仮名遣いに改めました。

総合展示資料紹介・第5テーマ

「生き物たちの北海道」…あれ、植物は？

水島 未記

北海道研究センター 副センター長(自然系)

子どもたちにも人気の総合展示第5テーマ「生き物たちの北海道」。哺乳類・鳥類の剥製や昆虫の標本などが並ぶ中で、実は植物の標本は1点もないことにお気づきでしょうか。展示を見たお客様から、「あれ、植物はないの?」と不満の声がしばしば聞かれる…という事実は残念ながらごさいます。植物担当の学芸員としては悲しいことですが、多くの人は「生き物」というと哺乳類や昆虫など動くものだけをイメージするようです。この文章を読んだみなさんは、ぜひ、植物だって(キノコや細菌だって)生き物なんだと覚えてくださいね。

さて、第5テーマに植物標本がないには理由があります。剥製や昆虫標本が生きている時の姿とほぼ同じなのに対して、植物の標本(腊葉標本)は平面にして乾燥させた「押し花」。第5テーマの展示は北海道の自然の風景をイメージした「舞台」に標本を配置して生き物同士の〈つながり〉を伝えるという手法で表現していますが、

その中に平面の押し花があったら浮いてしまいますよね? そのため、あえて展示物には入れなかったのです。

それでも、この展示の中で植物には大切な役割があります。森や川のエリアにある、黒いシルエットの樹

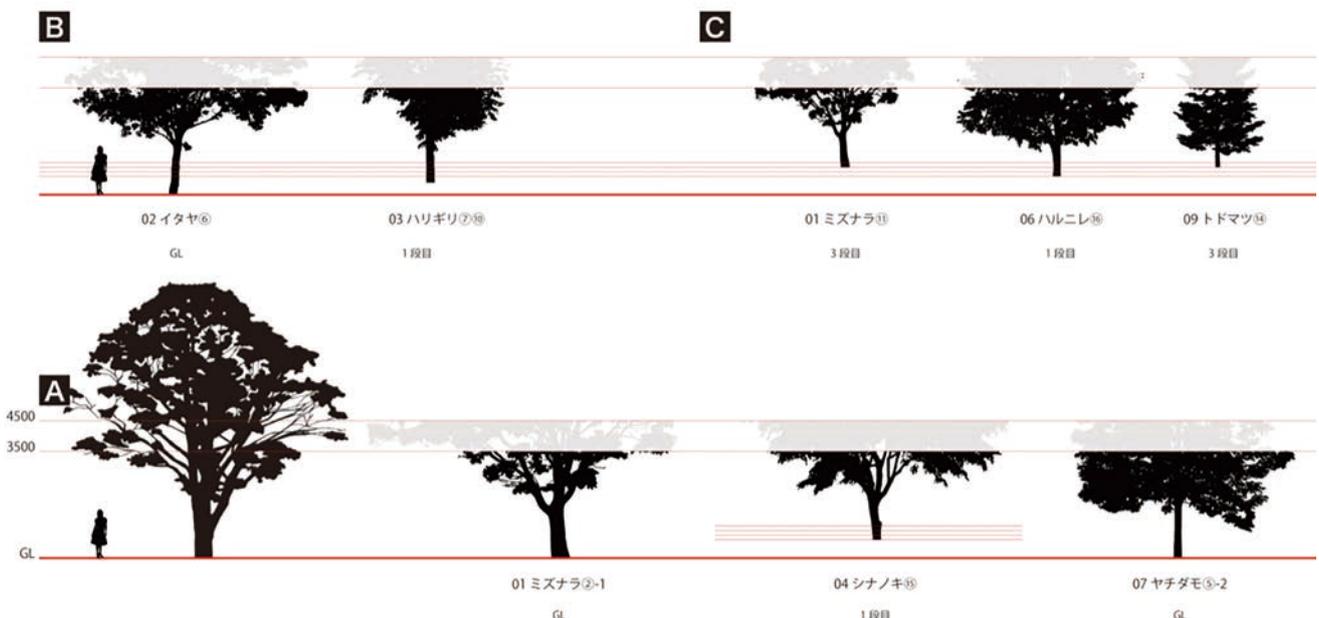
木がその一つです。樹木は動物たちが暮らす「舞台」、つまり周囲の環境の重要な要素です。さらにこれらの樹木、実は、この木はミズナラ、これはハルニレというように、1本1本、種類が決まっています。樹木は、環境によって好んで生える種類が違います。山の上の乾燥気味な尾根から、沢沿いのやや湿った斜面を経て、水はけの悪い湿地まで、展示の中では、それぞれの場所に合わせた樹種を配置しています。そして、そのシルエット



第5テーマの「森」に並ぶ樹木

は、枝ぶりや葉の形など樹種ごとの特徴を捉えた輪郭で、よく見ると何の木がわかるようにつくられています。北海道の樹木について少しでも知ってる方は、これは何の木かな?と推理しながら見てみてください。

また、タッチパネル式の解説装置「生き物つながりナビ」の中では、どんぐりをはじめいろいろな植物が登場。動物たちとの〈つながり〉や、生態系の中での働きがわかるようになっています。



展示設計時の資料より、各樹木の位置とサイズを検討するための図面

研究活動紹介

アイヌ民族のクワサキ

－ 文献と実物から見えてくるもの －

石井 祐 実

アイヌ民族文化研究センター 学芸員



1998年生まれ。新潟県新発田市出身。2025年より当館学芸員。専門はアイヌ史。写真は当館総合展示室のアイヌの伝統家屋の前にて。

飾が付けられています(写真1、2)。形が古代の鋤の先に付ける金属製品と似ていることで、和人から「クワサキ」と呼称されました。アイヌ語の呼称については、例えば久保寺逸彦(1992)は、pera-ush tomi kamui、kirau-ush kamui、kirau tomi kamuiとしています。それぞれ、「籠のついた宝物の神」、「角のついた神」、「角の宝物の神」と訳せます。

どのような人物が持つのかについて、文献の中で「ヘラウシトミカムイ、是男夷宝なり」(松浦 1999)と説明され、とりわけ男性の宝であったことがうかがえます。さらに、「夷中多く有物にあらず、稀に所持せり」(坂倉 1972)とされ、あまり数の多くない宝でした。

用途は主に、「病スル時、其ノ枕上ニ立テ災ヲ払フ」(新井 1906)と、精

神的な働きが認められていて、災いを払う効果があるとされました。保管にあたっては、「常に茅屋に置ときは、必ず祟をなすと云ふ」(松前 1979)と人が暮らす場所に置く^{たな}と祟りがあると信じられていました。

それ以外にも、1669(寛文9)年のシャクシャインの戦いに関する記録では、松前藩との戦いに敗れた際、宝の一つとしてクワサキも罪を贖^{あがな}う財として松前藩に渡されたことが記されています(松宮 1964)。アイヌの人々はクワサキをさまざまな目的と考えをもって使用したことを文献から知ることができます。

研究するにあたって

このように、研究を始めた当初は、クワサキについて理解を深めるため探検家や江戸幕府の関係者など、和人が残した著作を読み解き、クワサキがどのように記録されてきたのかを整理することで、当時の人々がクワサキをどのように捉えていたのかを知る手がかりを得ようと思いました。

はじめに

「アイヌ民族の研究を始めたきっかけはなに？」とよく聞かれます。幼い頃から歴史に興味があり、博物館に行ったり、図書館で郷土資料を読んだりするのが好きでした。中学生のとき、地元の図書館の北海道コーナーに置かれていた金田一京助によるアイヌの英雄叙事詩『虎杖丸の曲』という本を手に取りました。当時は内容を十分に理解できませんでしたが、アイヌ語と金田一京助による訳註の存在に強く惹かれ、アイヌの歴史や文化をもっと知りたいと思うようになりました。

さらに、大学生になってから、17～19世紀末にかけてアイヌについて記した和人(日本列島の主に本州から九州を出自とする人々を、アイヌに対する意味で呼ぶときの呼び名)による日記や地誌を読んでいる中で、「クワサキ」というものがたびたび登場することに気づきました。その存在に純粋な面白さを感じたことが、研究を始めたきっかけです。

アイヌ民族のクワサキとは

クワサキの大きさは縦40～45cmのものが多く、鉄や真鍮で製作され、角2本と胴部、銀でできた円形の装



写真1 アイヌ民族のクワサキ(表)
東北歴史博物館蔵



写真2 アイヌ民族のクワサキ(裏)
東北歴史博物館蔵

あわせて力を入れたのは、現存するクワサキについて、博物館などの収蔵施設を訪れて行う実物の調査です。現在、国内の収蔵施設において全体の形状が把握できるクワサキは、小樽市総合博物館に1点、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館に1点、市立函館博物館に1点、東北歴史博物館に2点、東京国立博物館に3点、九州国立博物館に1点(東京国立博物館寄託資料)計9点が確認されています。

北海道で出土したものが貴重な資料だということで道外の博物館に寄贈されたり、道外の研究者が取得したりした経緯から、多くが北海道外の博物館に所蔵されているのが特徴です。資料の現存数はアイヌ民族資料の中では決して多いとは言えませんが、見方を変えれば、現存資料の全体像を把握しやすい資料であるとも考え、調査を行っています。

調査では、主に計測と撮影をします。大きさや形状、装飾の特徴など、文献からは読み取ることのできない情報を一つ一つ確認していくのです。中でもクワサキの裏側(写真2)の様子については、これまでの文献や絵画資料ではあまり触れられてこなかったため、そこもしっかり見るようにしています。裏側から見える装飾の取り付け方、表側との違いから、クワサキがアイヌ社会で担う役割が今後見えてくるかもしれないと思っています。

また、近年の研究でクワサキは和人の兜の鍬形を意識して製作されたことが指摘されています(瀬川 2009、関根 2014)。鍬形とは兜の正面につく前立物の一種です。クワサキのオリジナルである兜の鍬形が、かつてアイヌの人々が暮らす地域にどのくらい存在したのか、さらに資料の特徴を比較することでアイヌの人々がクワサキに求める要素が見えてくる



写真3 クワサキの原型とされる兜の鍬形 市立函館博物館蔵

と思います。兜の鍬形の文献・実物の調査も行っています。

おわりに

以上のように、文献調査と資料調査を組み合わせることで、クワサキの具体的な姿や役割を明らかにしたいと考えています。クワサキを含むアイヌ民族資料を検討することで、資料の特徴にとどまらず、それを取り巻くアイヌ社会と和人社会の関係性や、人々の暮らしのあり方を捉えたいです。

まだ試行錯誤の途中で、十分な結論に到達できていませんが、研究の可能性について考えるたびに、少しずつ世界が広がっていくように感じています。これからも研究を重ねながら、クワサキの面白さを多くの方に知っていただけるよう、丁寧に研究に取り組んでいきたいと思っています。

※引用史料中には、現在の観点からすると差別的と受け止められる用語や表現が含まれるが、歴史資料としてあえて原文のままとした。

引用文献

- 新井白石「本朝軍記考」国書刊行会編『新井白石全集』第3巻、国書刊行会、1906年
久保寺逸彦「アイヌ語・日本語辞典稿」『久保寺逸彦著作集』第4巻、草風館、2020年、初出1992年
坂倉源次郎「北海随筆」大友喜作『北門叢書』第2冊、国書刊行会、1972年
瀬川拓郎「宝の王の誕生—アイヌの宝器『鍬形』の起源をめぐる型式学的検討—」『北海道考古学』、2009年
関根達人「アイヌの宝物とツクナイ」『人文社会論叢』32号、弘前大学人文社会科学部、2014年
松浦武四郎著；秋葉實翻刻・編『蝦夷日誌』2編、北海道出版企画センター、1999年
松前広長「松前志」寺沢一ほか編『北方未公開古文書集成』、叢文社、1979年
松宮観山「蝦夷談筆記」高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第4巻、三一書房、1964年

解説案内スタッフレポート

北海道鳥瞰図をじっくりご覧ください

第26回企画テーマ展「吉田初三郎が描いた北海道」をご覧くださいませましたでしょうか？

実は北海道鳥瞰図は高精細な複製ではありますが総合展示室2階でいつでも観ることが可能です。2階へ向かう長いエスカレーターは次のフロアへ誘うアプローチとなり降り立つと北海道鳥瞰図が目前に現れます。その大きさと独特な技法によりデフォルメされた芸術性に思わず感嘆の声を上げるお客様もいらっしゃるほどです。そしてじっくりと眺めながら気になる地名や場所を探している様子も見受けられます。私は室蘭で生まれ育ったので室蘭とその周辺に目を奪われました。

全体から受ける印象とは裏腹に部

分的には細部も忠実に描き込まれている事に驚きを隠せません。例えば室蘭市舟見町の追直浜（現在は追直漁港）に浮かぶニラス岩や引き潮の時しか近づけない蓬萊門ほうらいもんと思われる門のような形をした大きな岩等です。地球岬の灯台は今では無人化のため灯台の周りは青い芝となっていますが作品では灯台の周りに当時存在した灯台守の官舎が描かれています。洞爺湖周辺を見ると向洞爺に小さな浮見堂を見つけました。皆様も北海道鳥瞰図を鑑賞する際には全体の美しさもさることながら細部もじっくりご覧ください。小さな発見が感動を呼ぶかもしれません。その時はぜひ案内スタッフにお声がけ頂き、その感動を共有くださると幸いです。

中 條 幸 江

事業部教育・広報課 解説案内スタッフ



北海道鳥瞰図の室蘭の抜粋



現在の地球岬

トピックス ここに注目！

北海道博物館のウェブサイト

当館は2023年10月に文化庁から認定を受けた「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光推進事業」により、2025年2月にウェブサイトをリニューアルしました。皆さんもうご覧いただけましたか？

新しいウェブサイトには、お客さまの知りたい情報がすぐ見つけられるよう、トップページに3つのナビゲーションメニューを設けています。

■STEP 1 「体験する」

ワークショップや講座、自然観察会などのイベントや、標本に触れたり道具を使ったり、さまざまな体験ができる「はっけん広場」の情報を集めました。当館をはじめ、国内のミュージアムが参加し自宅で楽しめるぬりえや工作、ゲームなどをウェブ上で公開する「おうちミュージアム」も、こちらからご覧いただけます。

■STEP 2 「発見する」

総合展示室における期間限定の展示、当館の建物の魅力や野幌森林公園エリアのみどころなど、当館のさまざまな楽しみ方を紹介する情報を集めました。360度画像で総合展示室を歩いているように鑑賞できる「バーチャル北海道博物館」も、こちらからご覧いただけます。

■STEP 3 「知の泉へ」

北海道のことをより深く知りたい方

櫻 井 万里子

学芸部展示・資料課資料情報係長

のために、当館の収蔵資料や研究などの情報を集めました。おすすめは「収蔵資料検索」。トップ画面は開くたびに異なる資料がランダムに表示されるので、訪れるたび意外な収蔵資料が見つかるかもしれません。

今後もウェブサイトでは、展示会や行事のお知らせだけでなく、ふだんお客さまの目に触れることのない日々の活動や、研究の成果などを紹介していきます。ぜひ訪れてみてください。



ウェブサイトのトップページ STEP 2 「発見する」

アイヌ民族文化研究センターだより

総合展示「アイヌ文化の世界」を一部リニューアルしました

吉川 佳見

アイヌ民族文化研究センター 研究主査

2026年2月、文化庁の補助事業(※注)により、総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」の展示の一部改修を行いました。ここでは主な改修箇所をとりあげて紹介します。

① 展示ケースを新設しました

エレベーター前に新しく展示ケースを設置し、「クローズアップ展示4」をここに移動させました(写真1)。また、旧クローズアップ展示4のケースには、主に20世紀以降のアイヌの歩みにかんする資料を展示しました。同時代の資料はこれまで隣接のコーナーで紹介していましたが、今回の改修で展示スペースが拡がり、より充実した内容となったのではないかと思います。

② 衣服の展示を新しくしました

これまで定期的に展示入れ替えをしていたアイヌの衣服ですが、今回、衣服の演習具を更新し、儀礼用の冠や、耳飾りなどの装身具を身につけた状態で展示できるようにしました(写真2)。

また、ケース内に二着、衣服を入れることができるようになりました。今後、特別な場での着物と日常着を見比べたり、男女の着物を見比べたりできる展示を実施していく予定です。

③ 伝統家屋の建設のようすを見られるようになりました

伝統家屋前にある解説パネルを改訂するとともに、解説パネルの横に小型のモニターを設置し、この家屋を建設した際の映像(ダイジェスト版)を見ていただけるようにしました(写真3)。

このほかにも、第2テーマ内のさまざまところで、解説パネルの改訂や資料の更新を行いましたので、ぜひご来館のうえ、ご覧ください。



写真1 新設したケース



写真2 耳飾りのほか、儀礼用の冠や刀などを身につけた姿を展示



写真3 建設時のようす(動画、1971年撮影)

※注 文化庁補助事業の詳細については、「森のちゃれんがニュース」39号(p.6)をご覧ください。バックナンバーは、当館ウェブサイトより閲覧できます。

活動ダイアリー

2025年12月～2026年2月の記録

12月3日 (水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：小川 正人・鈴木琢也

12月6日 (土)

■「ちゃれんがワークショップ「稲わらで「鍋敷き」を作ってみよう！」を開催。担当：尾曲香織・表深太・谷口生貴斗【写真1】

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)⑫」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑

■はっけんイベント「わら馬をつくろう」を開催(2月1日までの土・日・祝)。

12月13日 (土)

■連続講座「学び直しの易しい地学講座(全4回)地学概論・地球のしくみ」を開催。担当：成田敦史

12月18日 (木)

■臨時休館(12月19日まで)。総合展示室の清掃・点検を実施。

12月20日 (土)

■総合展示室 クローズアップ展示⑩～⑦を展示入替(4月9日(木)まで。①と②は2月12日(木)まで)。

⑩最新研究報告！馬追丘陵から発見されたトウキョウホタテの古生態・古環境

①『蝦夷島奇観』模写本から②—松前・箱館の人びとの暮らし—

②北海道の百貨店

③アイヌ語で楽しむ野幌森林公園の植物(1)

④アイヌ語の辞典いろいろ

⑤新しく仲間入りした生活・産業資料たち

⑥懐かしのファミコン

⑦剥製標本ができるまで

1月10日 (土)

■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう～林業編～」を2回開催。担当：山際秀紀・博物館研究センター【写真2】

1月17日 (土)

■連続講座「学び直しの易しい地学講座(全4回)第2回 宇宙・地球・生命の歴史」を開催。担当：成田敦史

1月21日 (水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：尾曲香織・三浦泰之

1月24日 (土)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)①」を開催。担当：東俊佑

1月25日 (日)

■ミュージアムカレッジ「女性のライフコースと裁縫」が大雪により中止。担当：尾曲香織

1月31日 (土)

■第26回企画テーマ展「吉田初三郎が描いた北海道」開催(3月22日(日)まで)。

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)②」を開催。担当：東俊佑

2月4日 (水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：石子智康・鈴木明世

2月7日 (土)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)③」を開催。担当：東俊佑

■はっけんイベント「とびだす！北海道MAPをつくろう」を開催(3月29日までの土・日・祝)。

2月8日 (日)

■連続講座「学び直しの易しい地学講座(全4回)第3回 地学の調べ方」を開催。担当：成田敦史

2月11日 (水・祝)

■第26回企画テーマ展関連ミュージアムトークを開催。担当：田中祐未

2月13日 (金)

■総合展示室 クローズアップ展示①と②を展示入替(4月9日(木)まで)。

①異国船の蝦夷地来航—当館所蔵文書資料の紹介—

②新しく仲間入りした歴史資料たち

2月14日 (土)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)④」を開催。担当：東俊佑

2月15日 (日)

■ミュージアムカレッジ「鳥瞰図絵師・吉田初三郎と北海道」を開催。担当：田中祐未

2月18日 (水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：櫻井万里子

2月21日 (土)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)⑤」を開催。担当：三浦泰之

2月22日 (日)

■北海道博物館開館10周年記念スペシャルトーク「恐竜から始まるミュージアム体験」および関連イベントを開催。講師：小林快次氏(北海道大学総合博物館教授)【写真3】【写真4】

2月23日 (月・祝)

■第26回企画テーマ展関連ミュージアムトークを開催。担当：石子智康

2月28日 (土)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全8回)⑥」を開催。担当：三浦泰之

■自然観察会「動物の足跡を追いかけてよう！」を開催。担当：表深太・水島未記・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ

凡例

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

※教育普及活動の担当で、所属の記載が無い者は当館職員です。



写真1



写真2



写真3



写真4

来館者数

○2025年12月～2026年2月

総合展示室 7,593人 特別展示室 4,134人

○累計(2015年4月～2026年2月)

総合展示室 955,500人 特別展示室 645,051人

はっけん広場 1,632人

はっけん広場 144,583人

森のちゃれんがニュース 第43号

発行日：2026年3月26日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2026